〔信濃地名考中〕曾乃原異說

世に名所集といふもの、俚俗の言を記し傳へたる多し、まことの薗原は、伊奈郡小野川の奥なる曾の原村正說也、宗祇のいはゆる美濃信濃のくに堺にありとは是也、一說曾の原は小縣郡そめやの上にありといふ、是をおい人に問へば、眞田のおくにありて、昔は十の原なるを、今はとをのはらとよべりとぞ、されば曾我物語に、淺間三原その原を狩くらすなど書たれば、文花にもせよ、此異說中代より見えたり、其地は根津より山の溫泉を過て、田代といふ所に出て、眞田の道に會ふ、其邊をいふよしなれば、世に根津近き所にありと出たるは此處なるべし、又一說曾の原は佐久郡にあり、世に小諸の山の手に有など書たり、按に布施村（布施を伏屋など附會せり）、右の方小諸澤といふより登れば、長者原といふ有、長者屋敷の跡とて、（いなゐ郡その原村にも同跡あり）卯花（ウツギ）の垣、埋れ水今にあり、これを曾の原などいふ、（幽齋老の木曾越に、ちくま川と望月の間にて、人やすむかきれを志めて山のおく卯の花さそふ谷の下水と）あり、是も土人の長者原の語を聞給ひけんとおぼゆ、又木曾路の歌の次に曾の原のうたも見えたるは、宗祇の說、美濃信濃の國界にありといふによられたる事あきらかなり、又佐久郡沓掛驛の山上にも曾の原といふあり、又高井郡にもふせ屋の原などいふあり、皆聞達を求るに出たる異說なるべし、據見えず、

〔新古今和歌集十羈旅〕玄なの丶みさかのかたかきたる繪に、そのはらといふ所に、旅人やどりて立ちあかしたる所を、　藤原輔尹朝臣

立ながら今宵はあけぬそのはらやふせやといふもかひなかりけり

〔新古今和歌集十一戀〕平定文家歌合に　坂上是則

そのはらやふせやにおふるはゝきゞの有とは見えてあはぬ君哉

〔西遊行囊抄四上〕桔梗原或歸經原書之

右ノ方松本ノ城邊ニッゞキ、行程五里ノ野ナリ、左ハ山不遠、前後ハ二里許ノ曠々タル芝野也、六

桔梗原